

おわりに

「ロシアはもう普通の国」 関係者からよく聴かれた言葉である。この国は十数年前、共産主義を放棄して自由と民主主義を選択し、われわれと同じ価値観に立つ国となった。使節団などに参加して、ウォッカの乾杯で語り合つと、随分と日本に対する理解の深さを感じる。相性は悪くなさそうだ。一方で、北方領土問題の姿勢には、大方の人は失望している。一九四五年八月八日にソ連が日ソ中立条約を一方的に破棄した事実を知るロシア市民はほとんどおらず、まだ歴史を共有できる段階にはいたつてない。最近のプーチン政権の権威主義的な傾向にも懸念が高まっている。

日本にとって、すぐ近くのサハリンやシベリアは、ヨーロッパでの北海に匹敵する資源開発の舞台である。このような場所では、資源国と消費国とが互いに関わり合い、さらに投資主体として参加していくことで、新しい展望が開けてくる。

資源問題は双方向と捕まえない。生産者と消費者が共に揃わなくては成り立たないのは資源開発の世界も同じである。日本人は、わが国には天然資源が無いとつい卑下したが

が、資源の無いことが弱い立場とは限らない。平時であれば、資源を売る立場よりも、資源を買う立場のほうが明らかに強い。日本はエネルギーをはじめ、大量の資源を消費しているが、その姿勢は非常に安定的、効率的であつて、資源国にとっては最も信頼のおける市場である。さらに、環境技術は世界で最も優れており、二十一世紀の世界基準を、とうに準備していると言つてよい。日本人はもつと自らもっている日本の市場というものの値打ちに自信をもつていいのではないか。

サハリン、東シベリアという新たな資源フロンティアを裏庭に控えて、日本という市場の存在感は増してきている。今こそ、日本は市場としての価値を最大の武器にして、投資家としての役割を最大限に発揮する時であろう。資源開発に参加するということは、その地域の秩序の構築に関与するということである。北東アジアにあつて、日本はすでに市場として大きなプレーヤーであり、投資家としても、さらなる役割が求められている。

本書は、二一年から二二年にかけて、筆者が客員研究員として滞在したオクスフォード・エネルギー研究所(Oxford Institute for Energy Studies: OIES)でまとめたロシア・カスピ海諸国の石油・天然ガス開発状況の研究が骨格となつている。この間の研究に関して、終始ご指導いただいたロバート・マブロー前所長には深甚なる謝意を表したい。

石油産業の基本的な構造に関する議論を、毎週の研究会で連綿と語っていたことが、全体をまとめる上で大きな助けとなった。さらに、研究所での定例の発表の前には、小生の用意した拙い英語のレジュメを、息もつかせぬ華麗な文体へと添削していただき、そのくだりを発表の席で読み上げながら深い興奮を味わったこともある。帰国の直前、マブロー所長は小生を北オクスフォードのご自宅の書齋に招いて下さった。初秋の午後、白ワインをご馳走になりながら、ふと見上げると、書齋の壁にはヘーゲルの若き日の肖像画が架けてある。謂れを尋ねると、マブロー所長は若い頃、哲学を志していたとのことであった。哲学と石油　小生には、照応する世界に思えるのだが。

本書は、先にこの「アジアを見る眼シリーズ」で刊行された神原達著『中国の石油と天然ガス』の姉妹編として企画されたものであるが、神原達氏には、本書出版の道筋を付け、かつ本書の構想の段階から議論の相手になっていただいた。さらに拙稿に眼を通し推敲の労を取って下さった。氏は小生が石油公団の新人のころからお世話になっていて、職場の大先輩であり、いつも連絡を取らせていただいているのだが、今回は具体的な助言の数々をいただいた。深く感謝の意を表したい。

また執筆中に、米国ヒューストンのライス大学にあるベーカー研究所で開催されたロシ

アの石油に関するシンポジウムに参加する機会を得たが、朝食後のホテルのロビーで会場へのシャトルバスを待つ間、挨拶を交わした初老の紳士が『ソ連圏の石油と天然ガス』の著者として高名なロバート・イーベル氏であった。氏は、シンポジウムの間、自ら講演もし、終始質疑に加わり、全体の議論を引っ張っていかれた。大御所でありながら、まったくの現役そのままの若々しさと、少しも飾らない。しかしシンポジウムに参加した後輩の私たちにはとても話のしやすい、素晴らしい碩学でいらした。氏に本書の計画を話して、『ソ連圏の石油と天然ガス』からのやや多い引用を願い出たところ快諾を得た。ここに深く謝意を表したい。

本書の編集企画においては、一貫してアジア経済研究所編集担当参事の新田淳一氏にお世話になった。氏には、一年間にわたってご指導をいただいた。篤く御礼申し上げます。カバーのデザインに関しては、長峰亜里氏に尽力していただいた。筆者には思い出深い写真を活用することができた。深く感謝したい。

二 五年一月

本村眞澄